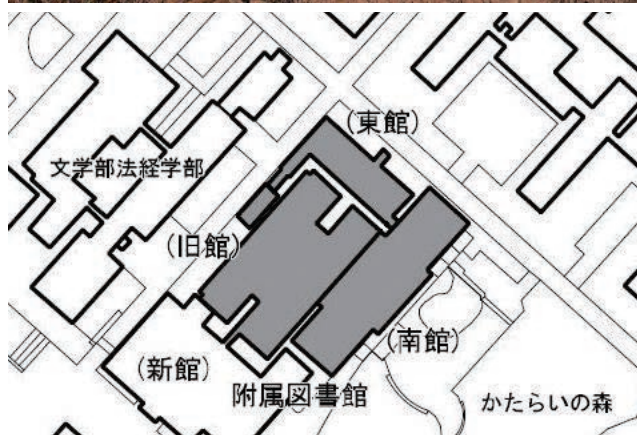


図書館を再開発し「考える学生」を育成する

改修と増築で整備する新しい図書館

千葉大学 アカデミック・リンク・センター



「アカデミック・リンク」へ生まれ変わった図書館は、アクティブラーニングスペース、コンテンツラボ、ティーチングハブで能動的学修を促進する。

アカデミック・リンクとは、生涯学び続ける基礎的能力及び知識活用能力を持つ「考える学生」を育成するために、千葉大学の附属図書館、総合メディア基盤センター及び普遍教育センターが協力して立ち上げた新しいコンセプトである。快適な学習空間（アクティブラーニングスペース）、学習のための図書・多様な資料群（コンテンツラボ）、そして学習する学生を支援する多様な人材（ティーチングハブ）を提供することにより学生をひきつけ、授業の受講前の準備及び受講後の展開といった能動的な学修時間の質を高めることを狙っている。

こうしたコンセプトを実現する場とするため、既存図書館の改修と増築が行われており、4つの棟の名称をつなぐとLINKとなる。

○L棟（Leaning、新館）

既存の図書館建物であり、「黙考する図書館」として、引き続き、一人静かに読書したり、思考したりする学習空間として活用されている。

○I棟（Investigation、東館）

増築建物であり、「研究・発信する図書館」として、本施設の司令塔であるアカデミック・リンク・センターが置かれるとともに、教育に関する研究開発、コンテンツ制作の拠点のための各室が配置されている。

○N棟（Networking、南館）

コンセプトを最も具現化する増築建物であり、「対話する図書館」として、一人の場合はもちろん、複数で学習することも想定したスペースを配置している。

○K棟（Knowledge、旧棟）

既存建物を耐震補強し大規模改修する棟。貴重図書室・マイクロ室の整備、巨大な電動集密書架の導入など「知識が眠る図書館」と位置づけている。

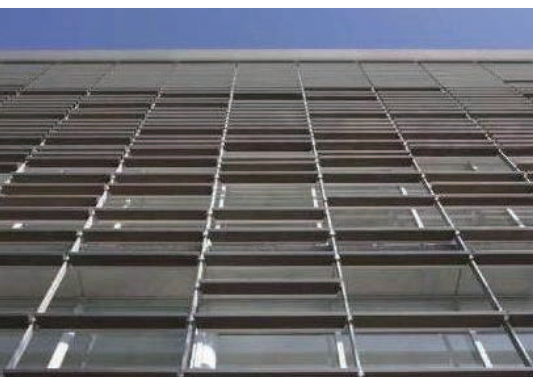
■施設計画の特徴

N棟は、グループ学習室（4階）、コミュニケーションエリア（2階）など能動的な学習の場を提供しているが、間仕切りをできる限り透明ガラスとすることによって、多様な学習活動が他の学生から「見られる」状況をつくり、相互に刺激を受けようとしている。また、N棟各階には「ブックツリー」と呼ぶ高さ3m、幅9mの書架がコア部を背にして設置されており、本の収納にとどまらず、学習に役立つコンテンツを学生に使いやすい形で提供し、また外部からも見とおせるギャラリーとして使うなど多目的に活用できるようになっている。

1階のセミナー室は、新しい形態の授業を行うことを想定しており、机・いすはすべて可動式、前後の壁は一面のホワイトボードとして、また、活動の様子が外部から見るようになるようになっている。

ミルフィーユ（千の葉という意味）ルーバーと呼ぶアルミと再生木材の複合素材ルーバーによる光熱環境の制御、窓際の熱負荷を低減する床面吹出口と天井吸気口を組み合わせたペリメーターレス空調などで、サステナブル建築を指向している。

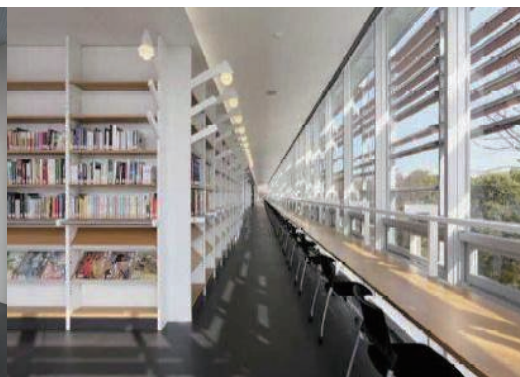
なお、本施設は、企画・デザインの秀逸さが認められ、2012年のグッドデザイン賞を受賞した。



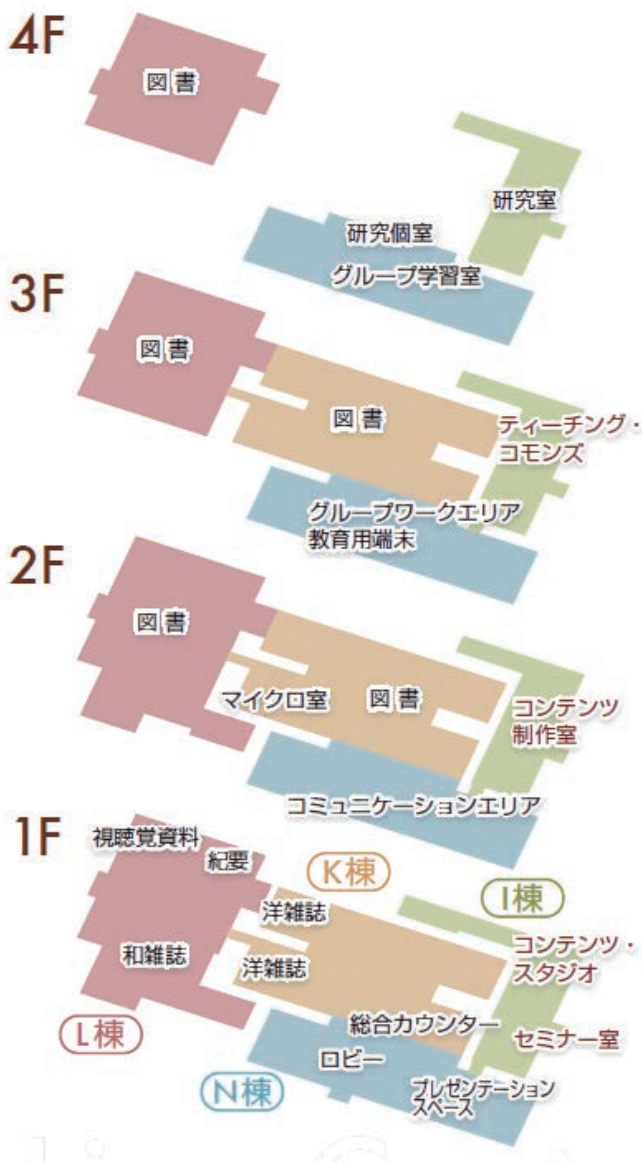
ミルフィーユルーバー



ガラスで仕切られたグループ学習室



ブックツリーと閲覧デスク



プレゼンテーションスペース… 学習や研究の成果を発信するための開放空間

コミュニケーションエリア… 自由で多様なスタイルによる学習のための空間

ティーチング・ commons… 教育の質を高め合う教員の共有空間

グループワークエリア… 知識を共有し活用する学習のための空間

コンテンツ制作室… 最先端の教育を支える教材開発支援の空間

コンテンツ・スタジオ… 動画教材コンテンツとなる授業が行われる空間

セミナー室… 創造的なワークショップ型授業が行われる空間

■プレゼンテーションスペースの活用状況



N棟1階のプレゼンテーションスペースでは、12時10分から昼休みの30分間を利用し、「1210あかりんアワー」と題した、学生が教員や職員、授業に近づくためのイベントが定期的に行われている。

「あの先生ってどんな研究をしているの?」「大学でまなぶってなに?」「千葉大にはどんな授業があるのだろう?」等、教職員の研究や仕事、趣味や特技などの意外な一面を知ったり、自分のアンテナに引っかかる授業を発見したりと思わぬ「アカデミックリンク」が生まれる30分間だ。



2階コミュニケーションエリア



4階グループ学習室



目の前に森が広がる個人用デスク